



平成22年11月22日  
卓話 『土の表情 ー左官を通じてー』  
左 官  
久住 有生 様

ご紹介いただいた久住有生です。左官屋の三代目です。本当は左官の仕事はすごく嫌いだったんですけど、高3の夏休みに1人でスペインやイタリアを旅したとき、いろんな石の建築とかガウディの建築を見て感動し、それでこの道に入りました。30代に入るまで、ひたすらお茶室とか土蔵とかの伝統的な仕事をやっていたんですけど、このままじゃいけないと思っているいろんな建築家の人と交流したり、海外に出て勉強するようになりました。

僕ら左官職人が一番技術を使う所は、やっぱり数寄屋造りとかお茶室です。関西、特に京都には沢山あって、まず竹を編んで土を塗る作業から始まります。お茶室というのは繊細に見せるために柱とか梁がすごく細く作られていて、下地をしっかり作らないと100年、200年持たないので、僕ら左官屋とか大工さんがすごく工夫して作ります。普通に住宅の壁を塗る場合は大体1～2週間で終わるんすけれども、伝統的な土壁の場合は小さなものでも1年、2年かかります。土もただ塗るだけでなく、わらを入れてその纖維が残るようにして壁に薄く何回も何回も塗っていきます。横から自然光が射すようなところでは土の肌の表情がすごく変わるので、本当に息を止めて壁を仕上げていきます。使う道具も普通の住宅だとせいぜい10種類くらいですけど、お茶室をやるとときは200～300種類の道具を使います。全ての道具がオーダーメイドで自分の手に合うように作ったものです。なぜお茶室が特別かというと、建具屋さん、畳屋さん、大工さん、職人のだれもが主役にならないよ

うに引き際を作ると  
いうか、脇役になる  
ように作るところに  
あると思います。

10年ぐらい前から、左官の技術を生かしてオブジェを作ったり、新しい建築に壁をデザインしたりするようになりました。そういうものを作る時、僕いろいろ土のサンプル、色のサンプルを作つて、その現場に合うように壁を作りますが、それが結構大事なことで、今の左官屋さんはなかなか自分たちでいろんな表情とか形を作ることができなくなっています。最近、店舗やマンションや学校のエントランスなどで土が使われるようになったことは、僕らにとってすごくうれしいことです。





海外ではフランスの建築学科の学生たちに教えたり、ヨーロッパの左官職人とか土のアーティストと交流しています。カッпадキアという場所では、風とか雨が土や岩を削って隆起と浸食を繰り返し、地面を作っていくさまを見ました。自分たちがお茶室を作るとき、100年、200年もつのは当たり前と誇りに思っていたんですけど、実はそういう土も自然は数千万年、数億年かけて作っていて、僕らはその長い間かかって作られた土を、ほんの一瞬借りて100年、200年の間壁にして、それがまた土に帰っていくんだなというようなことを考えさせられました。

ありがとうございました。